馬誌

器具部

四十五

和書門
類 一七三九五 號
函 一三〇 架
冊 文二 四

内閣文庫
和書
類 一七三九五 號
冊 六二 函
架 二一 五四

内閣文庫
番號 和 17395
冊數 62 (46)
函號 154 455

武備兵法

馬誌巻之四十五目録

器具部

沓
浮沓
馬上沓
馬鐙

一橋家圖書

淺草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

馬面

尾袋

馬誌巻之四十五

器具部

沓

一 馬具ハ古と今と大ゝ異なるものあり一ゝ擧て論
ゝ稱ゝ損益と考へて用ふへゝ沓もいろ〳〵
なり爪の裏痛みあるハ朝鮮沓より見ハ蹴鞠
沓の裏のやうに革と厚く重ね底はさきの尖
りゝる様と彫〳〵ゝ上の方ハ爪たまりと拵

え革緒と付さり馬具の事ハ養ひの外なれども
馬の損益ハ彩る事なへ吟味して置うよし
毛皆。苔皆。藁皆の製あるそれらとも心得さる
人ハ聽至へしされと朝鮮皆ハ志ろさるやう
に見へ武用の為ハ色角皆なしハ乗ても
氣をひるさやうハ仕立さるに優る事ハある
へくし 厩馬新論

一 馬皆の事麻の皆ハ一入よし 竹中百箇條

一 千里皆の事品この皆これありといとも取分
爪下と熟考してこれと用ゐると傳とも毛ハ若
荷と紙肥して就中長くそろひたると聚めて
二つはさき板りのせ紙ハさき図とさりて干
て皆ハ作る為り同くハ其冬寒の水に晒し
干して去めりのある図によく打てやうゝあ
とき皆ハかくなり皆とそろとき油とかし
引てうつへきなり 要馬秘極集

一 茅里皆の事ハ爪下輕くこさゆる事急類
なり毛ハ女の髪毛の取分け長きと以て皆と

かくるりかさ付ハ強き麻ゟ髪毛とゟい交せり
ゟ〳〵其後油とひきて置ゟり或ハ石岩ゟ出
るとも逆ふ事ゟ〳〵譬へハ柳の枝ゟ雪折ゟき
ゟ如〳〵ゟ中へ踏込ゆれハゟゟつく事ゟきゟ
依て切ゟ事ゟ〳〵故ゟ萬里皆とゟふゟり

一

強皆の事ゟ〳〵仕やうゟり或ハ馬の尾髪
ゟてもゟゟる紙ゟてもゟゟる又ハ木綿麻の類
その秘傳ゟりとゟへとも何れも能事ゟれハゟき
悪き事もゟり常の皆もゟく遠道と業

ときハ皆とうさて恊ハさるときの為ゟれハ
拵えゟるもよ〳〵真綿と引延〳〵能ゟ志め
付てかさゟるハ強き事無ゟりとゟつとも
解り強ゟ馬ゟ列中ゟゟり皆ハさゟ〳〵ゟか
へゟゟ依て馬ゟ外ゟゟるゟり武道勇術集

一

或説ゟ云く茗荷の莖と青ゟ取て又蒸〳〵
能ゟて道芝ゟ交へてかさ用ゟこれ秘事ゟり
とて

一

強皆の事ゟ〳〵ハかきつけゟハ強き芦ゟて皆ハ

櫻桐の毛を集め焼酎をかけ一昼夜すく
揉やうにすれば皆よかるべし　要馬秘極集

一　皆と女の髪を作れば二百里こさるといふ志ゝ
西中ハそへらぬ。試むへし　也　他ゝ事習ひ置
へし　騎士用本

一　寒皆の事　然るに此皆ハよき藁とをりて
をの円に大釜に水を入件のまゝと入く暫く
煮て其後その水ともに桶に入密中さゝ
てを以後日に干しあまびあるに成ほと

能ませて皆よかるべし　要馬秘極集

一　鐵皆といふ事なり　戦用によかるへし　この仕や
うハ蹄の裏をよく取松脂と硫粉硫黄と
調合して蹄裏へ塗り焼あゝ蹄の裏踏付け
豆しきやうにそへし　是ハ石原岩石と乗よも
皆とをそしてよさといひ伝あるなり　騎士用本

一　易に馬ハ火畜也故に蹄圓しといふ蹄を
馬の心臓に通ずれハ蹄と傷れハ馬心痛むと
いへり馬蹄可以踐霜雪といふも火軟なるゝ

故ゑ蹄より水氣を通ーつへられ磽确之地
必為緩轡恐傷蹄也といふも馬の弥ゑ取く
蹄ほと大切の所ハあ一然るゑ金沓とせて
蹄より地の水氣の通ハぬやうゑするハ馬を
愛せて沓と愛せとといふへ一安都馬具佐

一
弓馬故實ゑ云く沓とハうつともかくるともいふ
とるとハおこせてといふなり　伊勢家生右之書

浮沓

一
浮沓ハ木綿より布紙ひよりなり門の方に三重布
と麦漆ゑて付るなり右の沓ふてハ流川二千間三千
間の所ハ越せて車自由ふひへとも浮渕又ハ長く越
ゑハ別格ゑ馬ゑ付るなれ是なくひてハ成さるなり

一
桐ゑて廣さ高さ一尺ゑて長さ二尺ゑて紙ひよりなり
挾箱へ入ひやうゑ畳みひやうに屏風の如くちやう
つひゑて紐所かけるねゑて志むる為端のちやう
つひ刀弟の蓋の如くまーてさて其上擇んてせき

油と筥のありは袋まして入口の所ハ押さへ括りて
あ方切付の下に一つはたく あ方まて二つ付るありたとひ
馬死ても浮なり秘所のよしなり 軍用心得之記

一 浮沓ハ長き方あとなり 楮の目の方上なり 木綿三重
目とふとさ一寸て沓の内の方に麦漆まて付重なり
あ方へ反く出し馬の腹へとるみを上緒まて結ふ
とき足疼さるなり 同上

一 馬浮沓掛やうの事 前輪三所 鞍二皆下るやうに
つけて乗へし乗人の腰の左右ハ付なり 武鑑輯畧

馬上沓

一 貞丈曰く昔の人常ハ馬ハ乗るとき左く
沓なり乗沓といふものハ下馬してハ沓とめく
と礼として足の入る所とつくといふ沓の鼻す
十二のひさあり左ねハ掛る所とたてあけと
も持あけともいふなり

一 射御持長記ハ云く沓ハ左すりたくへし

一 高忠聞書ハ云くとも革の沓なとハ晴のとき
ハたくへし略儀なり内こまてハ大笠熱のと

さも子細なし

一 貞丈云くとも革の沓とハつゝのたてあけと同し革にて作りたるとゝ略儀なり別に

の革にて造るとも本式とハなるなり

一 又云く片沓の禮といふハ田樂猿樂ふせんの者なとに馬上にて逢たるとき馬より下る事あゝハ左の沓をぬきて礼をなすことあり是と片沓の礼といふなり但し是も故實なり定り法なあゝハ左右とぬくへきなり

一 弓法私書に云く主人の御前にて馬に乗ゝハ沓をとゝくまきなり自然めつらしき馬とも所所にすりも上りて乗れなと作せゝる事毎度ありその時の事なり

貞丈云くはとさ主人ハ庭敷にゐりて見物ふなりをへて主人の出御のときハ沓をぬなり又馬場なとにて乗ゝ秘蔵馬なとを思ひ〳〵にせめなとするときハ沓をとゝくへし主人も若堂もまきて乗へきなり下馬し

てハ頻て脱へきなり

一 笠懸日記ニ云く沓の事とも革の沓ハいと
さゝ事なりもちなけハ清免の事なるへし
袴行縢のときハ内の方のそとを指あけへ
よくとし入へし

貞丈云くごめん革ハ柳色又茶色なども深
て摸様と白く深出しなる革なり是まて
ものあけの形となるなり筒の所ハ黒し
て黒く漆をぬるなり袴行縢といふ

ハ大臣ハ笠懸なとを門に稽古ハ射るとき
ハ行縢をとらすして小袴をなりて射る
と袴行縢といふなり是略儀なり

一 扇鏡ハ云く乗沓と書くなる事なと引
そろへて左のまゝ指かしこまりて左の沓と左
右のまゝを引ひろけてなるせ中をへきなりぬ
なるせ中をさゝ後一足引て蹴と取るなり左より
ぬく事なり

貞丈云く蹴とハ足のうしろなりかくとも

又あくとも必ず有り

一 又云く沓の新しきとハ踵と一すたり形けて置なり禮の一文字の下へうかゝやうなるなるなり

一 射手方間書ニ云く沓のつらハとも革ニまく

一 去さると男入道ともまく事何れも苦しからぬなれ

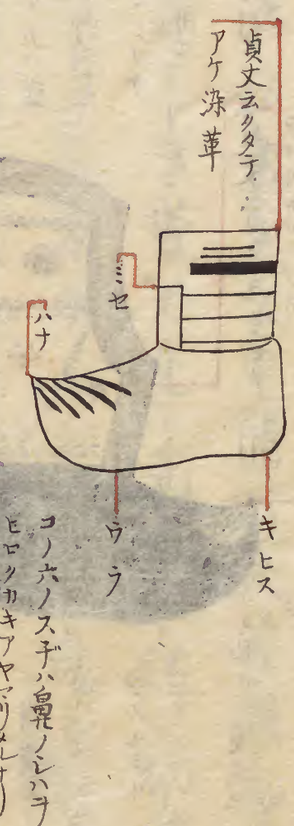
一 又云く庭乘ものとき沓とまくなりぬとやるこ主君の侍馬なりとも渡し給ふて私の鞍鐙をせむるときハ沓とまくへし私の鞍禮なりとも主君の前ニてハ沓とまくさるなり況や主君の御鞍禮のときハ中ニなる及ハて

一 侍供古實ニ云く下馬の所ニてやうて沓をぬきやすべし又云く時宜よりゆて下馬の所ニて沓をぬきゆハぬ事もあるへきなり出急用あるとの時ハさなりもあるへきなり是ハ法の外の事なり急きゆ時

あとハ苦しゝ物そゝり恵別ハぬくへき
事なれとも
一 弓法 私書ニ云く晴の大笠無あとの時ハ
新らしき皆とそりぬ事なり切付も新
らしきハ弟ふくきなり皆もそきあり
しるゝよきあり何れも故實なり

弓馬三冊物皆圖

又圖



一 大追捕方聞書ニ云く皆も新しきハ也へり
て悪しちと踏あらしきるうよきあり 古
へハ皆のうゝと塗てあるとちと古びかけ
てもきゝるといへり

一 寛正記ニ云く皆ハ熊の皮。敷皮の皆ハ法
の外なり

一 岡本記ニ云く皆の名産ハ尾張のきつゝと中
不の皆なり

一 大追捕政清記ニ云く新しき皆とまくハ
いゝも皆のうゝと砂の上ニこきりて和
らけて大笠熱の時ニまくへしかくの如
くにしてもきゆへ毛皆もせへらせハ 以上伊勢家坐右之書

馬鎧

一　今は私家には具足あることと得されとふ事のあると義解には具足は馬甲也と注しぬきれハ此ものむかしよりなりけれと兵士の私に蓄ふる事ハかなハさりしか源平盛衰記に生田森の戦のとき源氏の方に馬冑と着せさりし事見えたり其後の物は鎧の馬鎧（太平記）金鎧の馬鎧（明徳記）あとふものゝ見えたり古への製もかくやなりけん鎌倉年中行事

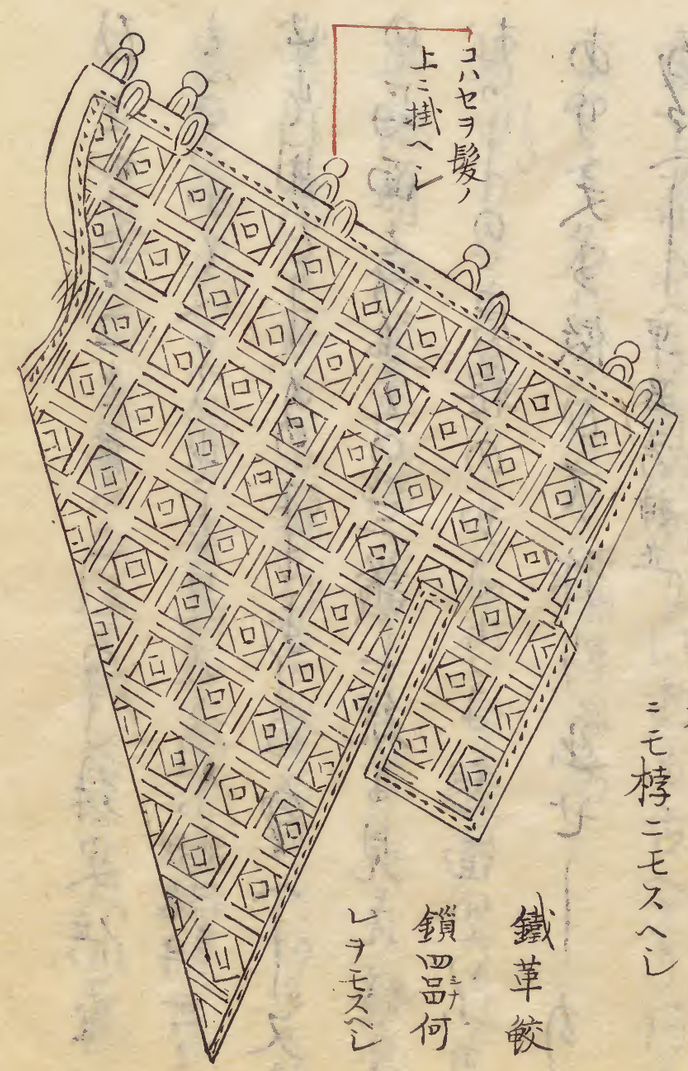
よも只馬鎧とのみいひて製さゝうあるべし
今の製大やうハ革とゝめて作る又馬面とて馬の
頭と蔽ふへきものありけれも古へよりなり
まやそ名ハ多元亨本朝軍器考
一馬甲の今ま見えしハ如何あるものなりけん太
平記明徳記まハ鎧のよし見えそう鎌倉年
中行事まハ鎧あるゝ今の世まなるものハ
皮ときゝひて作り金箔とゝ以て塗さるもの
あり公方供奉の兵合戦前まハ及ひ馬よろ

ひとかくること前ハこれなし殊更供奉の
ときハかくへゝそと見えされハ鎌倉年中行事世ま
必ま用ひしものまもあるぬあるへし又今
の馬面とゝふもの三議一統ま見えさり
むゝしの唐鞍のかさりま銀面とゝふもの
あり夫ま倣ひて作り出せしもの
あるへし 甲冑考補正

一馬鎧胸掛圖

家地ハ麻布ヲ用ユヘシ

梱金ハ四角ニモ亀甲ニモ格ニモスヘシ



風休

一軍防令義解ニ具装ハ馬甲也と記されハ古
の官軍の陣法ハ唐ニ習ひて馬甲あるり
されとも
天智天皇二年八月興大唐船師合戦官師
敗績して後十年正月百済の達率谷那
晋草素貴子谷秋春初等帰化したれハ此人
等唐の兵法と聞ひしるものなりしニ依て
始て鼓吹司と置き軍法を試諫せられと
天武帝の甲午の役ニハ此陣法を用ひられ

つれとも倭國の人情ニよりかるひ強くやあり
ゑん陣法漸ニ廢れ鼓吹の声跡絶て天慶
の私軍以後官軍といへとも私の軍を杖と
頼み給へハ官軍の正法といひなりしも自然
ニ別義となれり
一
源平盛衰記ニ梶原平三景時ハ二男平次景高
一陣ニ進んて攻のるハ大将軍宣ひけるハ大事の
城戸口の上ニハ高櫓ニ四國九州の精兵ともを
集め置さるそあやまちそる楯と重ね馬ニ

甲と着せ〳〵云物まてハ悪りなんとあり

一 太平記ニ根津小次郎ハふさへ革の轡ニ同〳〵
毛の兜と着て七つ物ハ山の如くニ取付付鹿毛
なる馬ニ馬轡とかけてとあり

一 太平記ニ云く畑六郎左衛門塩津惣太て立尺
三寸ありける馬ニ鎌の轡と懸させて劣らさる
云十二人と前後左右ニ相随ふとて

一 明徳記ニ云く一色左京大夫の裝束ハ赤地の
紙子ニ包こさる金胴ニ栗毛なる馬の八寸ニ
もつれさるニ白覆輪の鞍置て金鎌の馬轡
とかけてけり

一 鎌倉年中行事ニ云く合戦の前ニ馬轡と
懸ること前〳〵ハ是なさなり

一 織田軍記ニ云く天文十六年武者初として
参州出出陣なりけとき紅筋の肩巾羽織ニ
馬轡の出立あり是ハ平ニ中務計らひ〳〵
けるとなり

此等馬轡と用られる例なり鈴録に某

曾祖母ハ氏康の士大将尾崎常陸といひしの娘なり寛永のころまて存生て常ま語りしハ昔馬禮といふの武士の家まハ必てあるものなるま今ハ誰も馬禮を持ち士なりといへり馬入ハ関東の長技なると今の代ハ断廃して諸流を混合と記せり昔より家々まもあり必て用ひさるものなるハ武士の家まハ持ても世ま多くるへきま其物のかるさハ必て持さるまハあ〳〵ても見せされとも馬入甲州人ハ好みされハ其地方まハ好みさるなるへし但一軍毎まかくるまハあ〳〵て必て馬とも入れ敵中と走へき人の今日ハ馬甲と思ふるものまてありけるを ものハ武備志まハ圖せられる所ハ馬面簾馬搭後鎧項盪胄馬半面簾馬身甲の六品なり吾國まあるものハ鎧項といふへきものハ異邦のもの項より手うけて胸まを結へると御國のものハ胄よりあて項まを結ふるり

号ーとするものハ方ゟ長く今存せるものも
鞍副の方ハ尺弐寸ゟ五ゟ既ゟ近き而も
三寸半ゟ五ゟ背通りと角らけて裁作ら
ものゟり搭浸といふへきものハ異邦の号も
尾筒の度と同て造るゟ市國のものハ尾筒の上覆
ひ造る尾小覆へる事尺弐寸ゟ五ゟ馬面やゝ異か
れとも存せ盤胸身甲等ハある事か一鶏項。
搭浸と並へきものこれハ何と呼かくへきや而
見あらせ寸任せてハ革と七分ゟ五ゟ

中ハ星端ハ寸返ーて深く造りて地ゟとち
とるものゟり格異製あるへーいまゝ詳かせ
彈禮かとゝふハ方ゟ作れるものと源まて
造れるまこそ凡異邦のものハ兵器とさく
ゟる事ハ同事ーまハあれとも服ゟりも上すり
も鞨あるゟハ他へゟ市國のものハ馬面ゟ
ゟるとさ前ゟりも下ゟりも鞨あるものゟ
他へゟまくるゟ人の見ゟる而のものハ如何
あらーとハ知されとも中葉ゟり以来ハ

敵と働き馬と入る人の好みるれハかくの
如く造り出されしまそれのそうん粉尋ぬ
へき事なり以上安都馬具佐

一馬鎧の事世間まいふハ三頭ま鎧るまりりと
いふとの事ハひがことなり大徳ぷ徳皆具の
一装束と馬鎧といふ常まいふ馬鎧まハさま
仕やう習り伝れといさめ皮ないさめ亀甲
になりとも四角まなりとも残の大さ極ま切て
もり金まてなりとも又信濃麻まてなりとも
強き絲と指え線まて寸上まとり毛まても
或ハ白熊赤熊それハ面ての好次第ま隣へ一
伊達道具一通まていあるて大き馬と切まハ
三頭と多分切突たて逸るまのなり馬の
さめの具足なれハ念と入刀まても鎗まても
切もとはるもせさるやうま指え鎧る事な
なり又馬面といふものあり馬の改ま鎧るな
り武道勇術集

一馬仗ハ布ま金う革の板と縫付て左右まへく

是と浅前後。革前後といふるりまき大身者
ハ厚總もよろしんゝ前足のさぢきと試む
べし。元長短あるものなりまき支馬の腹
姿と隠さるまハ木綿も用ゐ端ゐ藏とかし
附れハまゝれさしてよしといふ 騎士用本

一 馬面馬鎧ハ戦場へ掛ゆ儀書あゐ見えゆ
ささゆ何のとき用ひゆものゆゆ勢揃
ゐたゝり用ひゆとゆて者これありゆ見ハ
め何覺悟仕るべきやの事勢揃陣切ゐと
ゐ馬鎧用ひさゆ合戦の場ゐても常ゐ用
ひさゆ城攻ゐゝゐ矢石烈しきとき用ひゆ
戦の場ゐ馬ゐけゆ事異本明德記鎌倉年
中行事等ゐ相見えゆ 安齋漫筆

一 拵さゐゐ馬甲ハ矢と防くのみまハあゝ
敵の馬と威し狂ふるさめゐり愚得隨筆

馬面

一　馬面の事近世其製作もやゝ絶るう如一
天正のころ戦國の最中まゝ〻ひ器と用る事
と聞き是鉄炮かとひしと持固めこゝ而と
馬入てあて倒し又敵の馬とおとしかと
なる戦利もあきよあゝねと今歩戦と事
格るも時勢あゝめ尤常ゝ用ひて馬の用ゝ
馴れしめそんハ俄ゝ用る事あゝハ騎士用木

一馬面圖

徳用サキモノナリ
ヨク吟味シテ用コヘシ

子リ革ヲ以テ
作ルモノナリ

一鏤錫　鏤錫ハ首蓋今ふ馬面なり詩の大雅ニ鉤膺鏤錫。又盾背の飾金と以て見と作る説文ニ馬頭の飾也。三曰鏝。車輪の鐵。徐曰く金革と刻て馬額ニ当る鏤ハ藏の名剛鐵と鏤とふ又金これと鏤とふ鏤錫と以て馬額ニ当る盾蔽とも張平子。西京の賦ニ金鋚鏤鍚とゝ〻り鋚ハ鍐と同〻〻馬首の飾。腦蓋也。徐曰く漢制。乘輿金鋚。馬頭の上ニあり金花の如〻と

鏇も亦鏇と同し和朝其品一定なしと雖
概革なりまき鳥毛を以て粧とし方鈑の
如く兼輿馬の沓上翟尾を揷ものを名つけ
て方鈑といふ和朝通用して其字をつくる
宜さに應とすへし

一 和名抄に金鏇蔡邕獨斷に云く金鏇字
亦作駿馬冠也高廣各五寸上如三華形也
今案ずるに俗云銀面の菖蒲形なり

一 延喜式に云く凡四月七日青馬毅頭鏇一疋前頭
及最後馬別着金裝自餘鳥裝尾袋當額花形以上二種各着鈴
此八青馬と奉るに早くより唐の振と用
らるるより尾袋也當額あり此二つのれハ
尾袋結ひ付ることそ所なる當額花形後に
所謂銀面なるものなり

一 西宮記に五月六日諸家出馬倭鞍菖蒲形。
杏葉雲珠尾袋。
此八倭の鞍に菖蒲形等と用ひらるる
菖蒲形八五月に取らるることそあれ所謂

當額の花形なり

一 北山抄に云く御覽女騎料御馬事（中略）次官緋闕腋。飾馬。判官闕腋。唐鞍。無銀面雲珠。唐尾と結ふ。此は銀面とのみ称しなり

一 飾抄に云く治暦元御禊。諸卿以上皆乘飾馬。菖蒲形銀面。唐鞍。杏葉。雲珠。頸。総如常。

一 天治或記に曰く殿下騎馬〻給ふの間出顔に突當給ひ菖蒲形人〻等危と称されい用意せへきなり

此は五月に取る菖蒲なるぬもあるへ〻いつ〻ら名となるものなり又菖蒲形の銀面といふときは菖蒲形なるぬもあるへ〻和名抄に如三華形也と云ふ銀面なるものは花形あるあり故に銀面の菖蒲形是なりといふなり藝田

神寶又春日の飾馬の圖並に花形あり

一 馬面は飾馬には今南都春日の神事加茂葵祭。臨時祭。勅使の飾馬には銀面と用る事あり乎解稲荷山下の御靈の飾り馬又は神馬

引馬まハ用ゆる事一見さう古代の風残り古き
ためしなれとも武器ハいふも用ゐ人の考へ
試みて知へきことなり　以上安都馬具佐

一
馬面の事然るに馬に面をかくる事或ハ
一騎にて進み出るとき駭出るなりこの面。
勇面よりして障泥下へ垂せ置ものなり馬上にて
ちらけ来出せへ敵の馬見とがめて驚駭
して行向ハさるゆ依てとつゝ馬上ゆ怖畏
して退返せと見ゆるものなり味方へ引返

せとさゝ高さまつして帰るへ敵の馬
もおそれぬれハ味方の馬も同然なりうけ
まつの事右の耳まかけ通しかけ
緒を以ておとういて入遠へ防りけの面にて
こませにかけ置也要馬秘格集

一馬面圖

此毛白鳥ノモヲ赤クソメ羽ニシテウヘタルハ猶以テ目ニ立テヨシ

馬面の恵物そりぬきまゝ〳〵但一度そ

もゝそるなり磐ハかくつの如くまくさりに
てそうつゞひ繁くゑみ弘るやうまゝ〳〵
下おとりいまゝハ小紐の形とこゝせすてかけ
もつ〳〵手早きやうにそるなり
まゑこのふち金ふして其下縁朱まぬる〳〵
但一恵物朱まゝてまゑこ下縁ともに金ふも
そるなり頭の毛ハ鶏の尾と殖てもとにハ赤る
の首の毛と整くうゆるなり 要馬秘抄集

一馬面ハ恵〳〵敵の馬狂ハ吾馬も狂ふ五ツ

其上馬いきはひとなるあり 準法功者書

尾袋

一 尾袋 倭名抄ニ尾韜考聲切韻ニ云〳〵紛音分俗云尾袋所以韜馬尾也

一 凡正月七日青馬鬣頭鑣尾袋著鈴當額花形延喜式

一 尾袋 付鈴 壽永元信範記 飾馬類句一覽

一 軍陣の馬の尾と尾袋ニ入ル事ハ努〳〵ある〳〵さる事あり 岡本記

一 尾袋と用ひれハ林中あとと行ニ利ありと

ふ又火の粉の盛る度て尾袋と掛されハ
火の粉と掛ふる豆一くるもてこれハ尻紙よ
りゝみて四方の根緒よ持る騎士用本

一 尾袋の寸長さ四尺五分と心乃へさるり馬具寸法記

一 尾袋ハ木布なり二尺三寸だくり縄三尺同と
なり騎士用本

国立公文書館
National Archives of Japan